

《窓》／《ANY WHERE OUT OF THE WORLD》／《午前一時に》／《藝術家の告白祈禱》

コンフィテール

——ボードレール散文詩篇富永太郎訳詩稿の成立

松本雅弘

I はじめに

本稿は、ボードレール『巴里の憂鬱』(Le Spleen de Paris)中の散文詩四篇(《Les fenêtres》、《Anywhere out of the world — N'importe où hors du monde》、《A une heure du matin》、《Le Confiteor de l'artiste》)の富永太郎訳詩稿——《窓》、《ANY WHERE OUT OF THE WORLD》、《午前一時に》、《藝術家の告白祈禱》——について、県立神奈川近代文学館所蔵「富永太郎特別資料」の自筆翻訳原稿*を検討することによって、その翻訳の生成過程を示すとともに、翻訳最終稿と『富永太郎詩集』刊行本諸版本文との異同をあきらかにしようとするものである。

韻文詩《或るまどんなに》と散文詩《道化とギナス》、《射的場と墓地》、《港》、《酔へ!》、《計畫》の六詩篇の翻訳稿については、

*本稿執筆にあたって、自筆翻訳原稿資料の使用をお認めくださいました富永一矢氏、県立神奈川近代文学館に篤くお礼申し上げます。

先にその生成過程および最終稿と刊行本諸版との異同を検討しているが、本稿はその続篇にあたるものである。

訳詩稿の初稿とそれに加えられたさまざまな改変、そして最終的に成った翻訳最終稿と諸刊本収録本文との異同は、先の論稿と同じ形式原則によって示すが、あらためて掲げれば、以下のとおりである。

一、まず翻訳草稿第一稿を参照の便宜のため各文頭に番号を付して全文を掲げる。それに続けて、第一稿にほどこされた改変を、改変部分のみ抄出して示す。そして改変を経た訳稿での最終的な形を翻訳最終稿としてあらためて全文を掲げる。なお、《藝術家の告白祈禱》については、後述する理由で第二稿も全文を掲げる。

二、第一稿において註記すべき事項については、冒頭に文番号をおいて説明を記す。

(例) 1 窓の外から…「窓の外」と書き、「外の」の「の」

を消して「か」に変え、下に「ら」と書いて続ける

三、第二稿以降の改変の提示については、冒頭に第一稿で付した文番号をおき、

〈文番号〉 〈改変前の語句〉 ↓ 〈改変後の語句〉

の形式で、改変箇所を前後も含めて引用し、改変前の語句と改変後の語句を提示する。改変を示す記号は用いず、必要に応じて説明をくわえる。また結局改変はおこなわれなかったものの、書込みがあったものについても、原則として漏らさず挙げることとし、第一稿での註記と同形式で示す。

(例) 1 窓の外からのぞく人は ↓ 窓の外からのぞき込む
人は

四、本文の表記については、翻訳草稿の原文にしたがう。ただし、いわゆる「くずし字」については、適宜表記を整えて示す。また翻訳草稿で、原稿用紙の一つの枠目に文字とともに書きこまれている記号・句読点については、訳稿には従わず、慣用通り一字分の枠目をとることにする。

五、翻訳最終稿と刊行本諸版本との異同についても、訳稿の改変と同じように、次の形式で示す。

〈文番号〉 〈翻訳最終稿の語句〉 ↓ 〈刊本本文の語句〉

これまで刊行された『富永太郎詩集』は、村井康男編『富永太郎詩集』(私家版、昭和二年)、富永次郎編『富永太郎詩集』(筑摩書房、昭和十六年)、大岡昇平編『富永太郎詩集』(創元社・創元選書、昭和

二十四年)、同『富永太郎詩集』(創元社・創元文庫、昭和二十六年)、同『定本 富永太郎詩集』(中央公論社、昭和四十六年)、同『富永太郎詩集』(求龍堂、昭和四十七年)、同『富永太郎詩集』(思潮社・現代詩文庫、昭和五十年)である。

私家版と筑摩書房版の異同は多くはないが、筑摩書房版についても重複を厭わず翻訳最終稿との異同を示す。創元選書版と創元文庫版は筑摩書房版にほぼ準ずるもので、この二つの版については、筑摩書房版との異同がある箇所についてのみ示し、他は省略することとする。また、創元選書版と創元文庫版は基本的に同一の本文であるが、時には異同が見られることもあり、その場合にはその相違点について付記する。

中央公論社版『定本 富永太郎詩集』は、創元選書版・創元文庫版とほぼ大岡昇平の編んだ詩集であるが、編者が後記「注と異文・年譜・書誌」で、「これまでの諸版は、翻訳は家蔵版『富永太郎詩集』を踏襲したが、草稿には訂正が傍記されただけのものもあり、本文と訂正のどっちを採るかについて、家蔵版編者村井康男に動揺があった模様で、統一されていない。こんど原文と対照しつつ、訂正をテキストとしたので、これまでの諸版とはかなり違ったところがある。」と書いているように、それ以前の刊行本とは異なる本文が散見されるため、この『定本 富永太郎詩集』については、私家版・筑摩書房版とほぼ同じく翻訳最終稿との異同を示す。それ以降に刊行された、おなじ編者による求龍堂版『富永太郎詩集』、思潮社現代詩文庫版『富永太郎詩集』は、いずれもその本文は中央公論社版とほぼ同一であるので(ただし、思潮社現代詩文庫版は漢字に新字体が用いられている)、いずれの版についても、中央公論社版との異同がある箇所についてのみ示し、他は省略することとする。

「改変・異同の記述についての補足」

α 訳稿にほどこされた改変は、大別すれば、最初の翻訳時に訳しながら同時におこなわれたと推定されるもの、後からほどこされたと考えられるもの、そのどちらかが不明なもの、に分けられる。

訳しながらほどこされたと考えられる改変——たとえば語句を消したその次の桁目に新しい語句を記しているような改変、あるいは語句を消してその右側に新たに語句を記しているが、文意から見てこれを訳しながら同時におこなわれた改変とみなすのが妥当であるような場合——については、第一稿として全体の訳稿を示した後にまとめて、その改変の様態を註記する。

第一稿以後の改変については、明らかな時間経過が認められるものについては、第二稿、第三稿としてその改変を示し、不明なものについては、適宜いずれの場合がより妥当かを判断して示し、また必要に応じて註記をほどこす。

β 漢字表記については、訳稿ではやや錯綜しており、いわゆる正字体と略字体・俗字体が混用されていることがある。多くの場合、ひとつの漢字について両字体が混用されるというのではなく、ある漢字については正字体、ある漢字については略字体・俗字体というように用いられている。ただしひとつの訳稿のなかで二つの字体が用いられているような例外もある。また、いわゆるくずし字で書かれている場合もあり、字体が分かち難いこともある。

この漢字表記の字体の問題は、漢字が仮名かという選択とくらべれば、むしろ書癖ということにも関わるであろうから、さほど重要とはいえないかもしれない。また、いづれにせよ発表時には正字体に直されて印刷に付されていたはずだとも考えられよう（実際に、没後発行の『富永太郎詩集』各版ではそのような表記法がとられている）。

したがって、いづれかに統一して示すべきであろうが、詩人の書癖

を知る便ともなることを考えて、翻訳草稿に読みとれる字体で記し、あえて統一をはかろうとはしなかった。

γ これまでの刊本での漢字表記・仮名表記は、昭和二年の私家版『富永太郎詩集』以降、中央公論社版『定本 富永太郎詩集』（昭和四十六年）および求龍堂版『富永太郎詩集』（昭和四十七年）まで、仮名文字は旧仮名遣い、漢字は旧字体が用いられているが、普及版の思潮社現代詩文庫版『富永太郎詩集』（昭和五十年）では、仮名文字については従来どおり旧仮名遣いを踏襲しつつも、漢字は新字体が用いられている。翻訳草稿と刊本でのこの漢字の字体の異同については、煩を避けて、特に必要な場合を除いて一々註しない（ただし、刊本間での漢字の字体の異同については、思潮社現代詩文庫版を除いて、この限りではない）。したがって、翻訳草稿と刊本での校異の提示に引かれる文中の漢字についてののみ、それぞれ草稿と刊本の表記に拠ることとし、漢字の字体の異同のみを網羅的に挙げることはしなかった。

II 《窓》訳詩稿の成立

〈発表誌〉 なし

〈初出〉 『富永太郎詩集』（昭和二年、私家版）

〈翻訳草稿〉 資料番号 40165

〈用紙〉 原稿用紙「東京 文房堂製」（二五字×二四行）二枚

〈筆記用具〉 ペン（ブルーブラックインク）、赤鉛筆

〈註記〉 原稿用紙一行目、四字下げで表題「窓（巴里の憂鬱才三十五）」¹。括弧記号は桁目一つを占めず、文字とともに一桁に記されている。

表題に続けて空白行をおかずに二行目から一字下げで本文。途中改行をおこなわず、原詩と同じく五詩節で訳文を構成する。

改変箇所は、本文と同じブルーブラックインクのペンで二重線または三重線などを引いて抹消された語句の右側に訂正・加筆。他に赤鉛筆による改変も一箇所ある。

【第一稿】三

窓(巴里の憂鬱才三十五)

1 開いた窓の外からのぞく人は決して閉ざされた窓を眺める人ほど多くのものを見るものではない。2 蠟燭の火に照らされた窓にもまして深い、神秘的な、豊かな、陰鬱な、心を眼を奪ふやうなものがまたとあらうか。3 日光の下で人が見ることの出来るものは、窓ガラスの内側で行はれることに比して常に興味の少ないものである。4 此の黒い、もしくはあかるい穴の中で、生命が生活し、生命が夢み、生命が悩むのである。

5 波のやうに起伏した屋根の向ふに一人の女が見える。6 盛りをすぎて既に皺がよつた、貧しい女である。7 いつも何かに寄りかゝつてゐて、決して外へ出掛けることがない。8 彼女の顔から、彼女の着物から、彼女の舉動から、いや殆んど何物からといふことはなく、私は此の女の物語を造り上げてしまう——といふよりは、むしろ昔噺を造り上げてしまつた、そして私は時々この噺を自分に話して聞かせるのである。

9 これが若し年とつた男であつたとしても、私は全く同じやうに容易に彼の昔噺を造り上げることが出来たであらう。

10 それから私は他人の身になつて生活し、苦しんだことを誇りに思ひながら床に就くのである。

11 諸君はかう云ふかも知れない、「その話しが本當だといふことは確かか、ね?」 12 私の外にある眞実がどうであらうと何の関りがあるものか——若しそれが私が生活する助けとなり、私が存在してゐることと、自分が何であるかといふことを感ずる助けとなるならば。

【訳出時改変】

1 窓の外から…「窓の外」と書き、「外の」の「の」を消して「か」に変え、下に「ら」と書いて続ける

2 蠟燭の火…「燭燭」と書いた後、最初の「燭」を変え、「蠟燭」とする(第二稿改変とも考えられる)

3 窓ガラスの内側で…「窓ガラスの後で」と書いた後、「後で」を消して「内側」とし、その下に「で」書いて続ける

3 行はれる…「起」と書いた後、これを消して「行」に変え、「はれる」と続ける

5 皺がよつた…「皺がより」と書いた後、「り」を消して「つ」に変え、「た」と続ける

9 これが若し年とつた男であつたとしても、…「としても」の読点は、訳者の書き癖により、「も」と同じ柁目右下部に記されているが、句読点をその前の柁目に入れながら次の柁目は空白として残すのが通例となつているにもかかわらず、この箇所では「も、」が埋められた次の柁目に「私」の偏が書きかけられており、これがすぐ消され、一字分空白を置いて、「私は全く…」と続けられている

12 私が生活する助け…最初「私が生活し」と書き、「し」を消して右横に「す」と書いて「る助け」と続ける

12 感ずる助けとなるならば…最初「感ずる助けとなら」と書き、「な」の次に「るな」を挿入して「感ずる助けとなるならば。」とする

【第二稿】（第一稿へのブルーブラック・インクによる改変・書込）

- 1 窓の外からのぞく人は ↓ 窓の外からのぞき込む人は
- 2 心を眼を奪ふ ↓ 人の眼を奪ふ （訳出時改変ともとれる）
- 3 比して ↓ 比べれば
- 4 あかるい穴 ↓ 明るい穴
- 5 皺がよつた ↓ 皺のよつた
- 8 彼女の顔から ↓ 私は此の女の顔から
- 8 彼女の着物から ↓ 衣物から
- 8 彼女の舉動から ↓ 舉動から
- 8 殆んど何物から ↓ 殆んど何から
- 8 私は此の女の物語を造り上げてしまふ――
- ↓ 此の女の身の上話を――
- 8 昔噺 ↓ 傳説
- * 「昔噺」を消していったん右横に「*（一字不明）噺」と書いて、これを消し、上に「傳説」と書いて挿入、あるいは、「昔噺」を消していったん右横に何か不明の一字（「話」？）書いた後、これを消して「噺」と書き、これをまた再度消して、上に「傳説」と書いて挿入したと見ることもできる。
- 8 私は時々この噺を自分に話して聞かせる
- ↓ 私は時々涙を流しながらこの話を自分に話して聞かせる
- 9 これが若し年とつた男 ↓ これが若し隣れな年とつた男
- * 「隣れな」は「隣れな」の誤記であるから、翻訳最終稿ではこの箇所は「隣れな」と訂正して示す
- 9 私は全く同じやうに容易に ↓ 私は全く同じ位容易に
- 9 彼の昔噺を造り上げることが出来たであらう。
- ↓ 彼の傳説を造り上げたであらう。
- 11 話し ↓ 話し

* 右横に「噺」と書きかけて、これを途中で消し、結局訂正せず

12 眞実がどうであらうと ↓ 眞実がどんなものであらうと

12 私が存在してゐること ↓ 私が自分の存在してゐること

12 感ずる助けとなるならば。 ↓ 感ずる助けとなつたものならば。

【第三稿】（第二稿への赤鉛筆による改変）

11 話しが本當だ ↓ 話しが事實だ

* この訂正箇所の改変指示は以下の通り――「本當」を二重線などで消さず、その右横上下、「本當」の範囲に短い横線を引き、その二本の横線で挟まれた二桁分の中に「事實」と記す。ただし、他の訳稿にも見られるこうした赤鉛筆による訂正では、元の語句が削除されているわけではないので、訳語の代替案が示されていると見ることもでき、選択の曖昧さが残ることになる。ここでは赤鉛筆による訂正を最終稿の訳語としてとることにする。

【翻訳最終稿】

（第一稿から第二稿および第三稿での改変を経て成立した

《窓》訳詩稿の全文）

窓（巴里の憂鬱才三十五）

1 開いた窓の外からのぞき込む人は決して閉ざされた窓を眺める人ほど多くのものを見るものではない。2 蠟燭の火に照らされた窓にもまして深い、神秘的な、豊かな、陰鬱な、人の眼を奪ふやうなものがまたとあらうか。3 日光の下で人が見ることの出来るものは、窓ガラスの内側で行はれることに比べれば常に興味の少ないものである。4 此の黒い、もしくは明るい穴の中で、生命が生活し、生命が夢み、生命が悩むのである。

5 波のやうに起伏した屋根の向ふに一人の女が見える。6 盛りをす

ぎて既に皺のよつた、貧しい女である。7 いつも何かに寄りかゝつてゐて、決して外へ出掛けることがない。8 私は此の女の顔から、衣物から、舉動から、いや殆んど何からといふことはなく、此の女の身の上話を——といふよりは、むしろ傳説を造り上げてしまった、そして私は時々涙を流しながらこの話を自分に話して聞かせるのである。

9 これが若し憐れな年とつた男であつたとしても、私は全く同じ位容易に彼の傳説を造り上げたであらう。

10 それから私は他人の身になつて生活し、苦しんだことを誇りに思ひながら床に就くのである。

11 諸君はかう云ふかも知れない、「その話しが事實だといふことは確かゝね？」 12 私の外にある眞実がどんなものであらうと何の関りがあるものか——若しそれが私が生活する助けとなり、私が自分の存在してゐることと、自分が何であるかといふことを感ずる助けとなつたものならば。

【翻訳最終稿と刊行本諸版本文との異同】

この翻訳は生前には発表されず、初出は先に示したように昭和二年の『富永太郎詩集』（私家版）である。それ以降、思潮社版『富永太郎詩集』（昭和五〇年）まで七冊の『詩集』に収録されたが、それぞれ右の翻訳最終稿との異同が存在する。以下、翻訳最終稿との異同を、冒頭に掲げた凡例にしたがって示す。

一、『富永太郎詩集』（私家版、昭和二年）

表題…窓（巴里の憂鬱才三十五） ↓ 窓（ボオドレエル）

4 明るい穴の中で、 ↓ 明るい空の中で、

8 傳説を造り上げてしまった、 ↓ 傳説を造りあげてしまった、

8 涙を流しながらこの話を ↓ 涙を流しながら、この話を

9 彼の傳説を造り上げたであらう。

↓ 彼の傳説を造りあげたであらう。

10 私は他人の身になつて生活し、苦しんだことを誇りに思ひながら床に就く

↓ 私は、他人の身になつて生活し苦しんだことを誇りに思ひながら、床に就く

11 その話しが事實だ ↓ その話しが本當だ

11 確かゝね？ ↓ 確かかね？

12 若しそれが私が生活する ↓ 若しそれが、私が生活する

二、『富永太郎詩集』（筑摩書房、昭和十六年）

表題…窓（巴里の憂鬱才三十五） ↓ 窓（ボオドレエル）

4 明るい穴の中で、 ↓ 明るい空の中で、

8 傳説を造り上げてしまった、 ↓ 傳説を造りあげてしまった、

8 涙を流しながらこの話を ↓ 涙を流しながら、この話を

9 彼の傳説を造り上げたであらう。

↓ 彼の傳説を造りあげたであらう。

10 私は他人の身になつて生活し、苦しんだことを誇りに思ひながら床に就く

↓ 私は、他人の身になつて生活し苦しんだことを誇りに思ひながら、床に就く

11 その話しが事實だ ↓ その話しが本當だ

11 確かゝね？ ↓ 確かかね？

12 若しそれが私が生活する ↓ 若しそれが、私が生活する

以上のように、翻訳最終稿と筑摩書房版『富永太郎詩集』との異同

は、私家版『富永太郎詩集』と同じである。

三、『富永太郎詩集』（創元社、創元選書、昭和二十四年）

翻訳最終稿との異同は、次の一点を除いて、筑摩書房版『富永太郎詩集』と同じ。

11 確か、ね？ ↓ 確か、ね？

四、『富永太郎詩集』（創元社、創元文庫、昭和二十六年）

翻訳最終稿との異同は、次の三点を除いて、筑摩書房版『富永太郎詩集』と同じ。

3 日光の下で ↓ 日光の下で「下」のルビなし

11 その話しが ↓ その話が

11 確か、ね？ ↓ 確か、ね？

したがって、創元文庫版は、創元選書版と第3文と第11文の二点で相違がある。

五、『定本 富永太郎詩集』（中央公論社、昭和四十六年）

表題…窓（巴里の憂鬱才三十五）

↓ 窓 ボードレール

4 明るい穴の中で、 ↓ 明るい空の中で、

8 涙を流しながらこの話を ↓ 涙を流しながら、この話を

9 彼の傳説を造り上げたであらう。

↓ 彼の傳説を造りあげたであらう。

12 若しそれが私が生活する ↓ 若しそれが、私が生活する

六、『富永太郎詩畫集』（求龍堂、昭和四十七年）

翻訳最終稿との異同は、中央公論社版と同じ。

七、『富永太郎詩集』（現代詩文庫、思潮社、昭和五十年）

漢字がすべて新字体に統一されていることを除き、中央公論社版と異同は同じ。

III 《ANY WHERE OUT OF THE WORLD》訳詩稿の成立

〈発表誌〉 なし

〈初 出〉 『富永太郎詩集』（昭和二年、私家版）

〈翻訳草稿〉 資料番号 40161

〈用 紙〉 原稿用紙「丸善特製 二」（二五字×二四行）二枚

〈筆記用具〉 ペン（ブルーブラックインク）、赤鉛筆

〈註 記〉 原稿用紙一行目、二字下げで表題「ANY WHERE OUT OF THE WORLD（巴里の憂鬱才四十八）」。括弧記号は桁目一つを占めず、文字とともに一桁に記されている。

表題に続けて空白行をおかずに二行目から一字下げで本文。途中改行が九回おこなわれ、十節よりなる原詩と同じく、十段落で訳文を構成する。

改変箇所は、本文と同じブルーブラックインクのペンで二重線または三重線などを引いて抹消された語句の右側に、ペン書きで訂正・加筆。他に赤鉛筆による改変も二箇所ある。

訳稿末尾、十九行目に、上から十六字の空白をおいて、本文と同じ

ブルーブラックインク・ペン書きで「二二・五・一一」と日付が記されている。

訳稿一枚目右面、8行目・12行目それぞれの上欄外に「？」の印があり、この部分を、8行目・12行目それぞれの文とともに示せば、次のようになってゐる。

8 ? 分の魂と談し合つて居る問題の一つなのである。
12 ? あの町は海岸で、家は大理石造りださうだ。それからあ

また訳稿二枚目には左右両面上部欄外に仏文の書込みあり。

右上上の欄外(12行目から8行目にかけての欄外上)書込みは、「Les analogies de la Mort / Je tiens notre affaire」。これは二行にわたつて書かれ、上下の文の間には一本の線が引かれている(あるいは上の行に下線が施されているとも見える)。ともに原詩第九節中の章句に対応し、連続した文章の一部ではあるが、それぞれ別の文章で、前者は第九節第二文の後半部(したがって、引用冒頭の「Les」の「L」は原詩では小文字)、後者は、「I」をはさんで、それに続く第三文前半部。対応する最終稿訳文は、それぞれ「死」にそっくり、「万事僕が呑み込んでゐるよ」。

左上上の欄外(17行目から13行目にかけての欄外上)書込みは、「cette moitié du néant」。これも原詩第九節後半中の章句で、対応する最終稿訳文は、「虚無の此の半分」。

【第一稿】

ANY WHERE OUT OF THE WORLD (巴里の憂鬱才四十八)

1 人生は一つの病院である。2 そこに居る患者はみんな寝台を換へやうと夢中になつてゐる。3 或るものはど

うせ苦しむなら暖爐の側でと思つてゐる。4 また或るものは窓際へ行つたらよくなるだらうと信じてゐる。

5 私はどこか他の處へ行つたらいつも幸福でゐられさうな気がする。6 この轉居の問題こそ、私が年自分の魂と談し合つて居る問題なのである。

「7 云つて御覧、私の魂さん、可哀さうな、かじかんだ魂さん、リスボンに住んだらどうだと思ふね？」

8 あすこは暖かいからお前は蜥蜴みたやうに元氣になるよ。

9 あの町は海岸だ。家は大理石造りださうだ。10 それからあの町の人

は植物が大嫌ひで、木はみんな引き抜いてしまふさうだ。11 あすこへ行けばお前のお好みの景色があるよ、光と鑛物で出来上つた景色だ、それが映る水もあるしね！

12 私の魂は答へない。

「13 お前は活動してゐるものを見ながら静かに暮らすのが好きなんだから、オランダへ——あの幸福な國へ住みに

行つたらどうだね。14 画廊にある繪で見てよくほめてゐた國へ行つたら、きつと氣が晴々するよ。15 ロッテルダムはどうだね？ 16 何しろお前は橋の林と、家の際に舫つてあ

る船が大好きなんだから？」

17 私の靈魂はやつぱり黙つてゐる。

「18 きつとバタビヤの方がもつと氣に入るかも知れないね。19 その上あそこには熱帯の美と結婚したヨーロッパの美があるね。」

20 一言も言はない。——21 私の魂は死んでゐるのだらうか？

「22 ぢやあお前は患らつてゐなければ面白くないやうな麻痺状態になつてしまつたんだね？ 23 若しさうなら『死』にそっくりな國へ行かう行かう。——24 万事僕が呑み込んでゐる

よ、可哀さうな魂さん！ 25トルネオ行きの支度をしやう。
26もつと遠くへ——バルチック海の涯まで行かう。27出来るこ
となら人間の居ないところまで行かう。28極地に住まう。

29そこでは太陽の光はたゞ斜に地球をかすつて行くだけだ。

30晝と夜との遅い交替が変化を無くしてしまふ、そして單
調を——虚無の此の半分を増すのだ。31そこでは長いこと
闇に浸つてゐられる。32北極光は僕等を樂しませやうと思
つて、時々地獄の花火の反射のやうに薔薇色の花束を
撒き散してくれるだらう。」

33遂に、突然私の魂は口を切つた、そして賢くもかう叫
んだのである、「34 どこでもいいゝわ！ 此の世
の外なら！」

35

二二五 一一

【訳出時改変】

2 そこに居る患者は…「患者は」と書いた後、これを削除し、次の
枡目から「そこに居る患者は」と訂正

6 この轉居の問題こそ、…「この問題が」と書いた後、「問題」を
削除し、次の枡目から「轉居の問題が」と書き、さらに「が」を削除
して次の枡目に「こそ」と続ける

7 リスボンに住んだらどうだと思ふね？…まず「リスボンに住んだ
らどうだらう？」と書き、「らう？」を削除して「ら」の右横に「ら
*（書きかけて消された不明の一字）」、「？」の右横に「ど」、「？」
の次の枡から「うだと思ふね？」と続けて、結局、「ら*」も「ど」
も「うだ」も削除

9 家は大理石造りださうだ。…「大理石造りで」と書いて、「で」
を削除して「だ」に変え、「さうだ。」と続ける

11 お前のお好みの景色…「お前の」に続けて、「好」の偏を書きか

けて消し、その右横、同じ枡目の中に、「お」と書いて「好みの」と
続ける

11 それが映る水もあるしね…「それを映」と書いて「を」消して「が」
に変え、「る水もあるしね」と続ける（この箇所、「を」を削除する
二重線が「映」にもかかつているのを、おそらく第三稿時、赤鉛筆で
「映」右横に「イキ」と記す）

18 氣に入るかも知れない。…「氣に入るだらう。」と書いて、「だ
らう。」を削除し、右横に「かも知」と書き、抹消された「だらう」
に続く枡目から「れないね。」と続ける

22 ぢやお前は患らつてゐなければ…「患つて」と書いた後、「つ
て」を消して右横に「らつ」と書き、「患」に「わづ」とルビを付し、
削除した「つて」に続く枡目から「てゐなければ」と続ける

25 トルネオ行きの支度…「トルネオ行きの用意」と書いて（「意」
は二画目まで書きかけ）「用意」を消し、右横に「支度」と書いて、
「意」を書きかけた枡目の次の枡から「をしやう」と続ける

27 出来ることなら…「出る」と書いて、「來」を挿入

28 極地に住まう。…「極地へ行つて住」と書き、「へ行つて住」を
削除して、「に住まう」に改変

32 地獄の花火の反射のやうに…「地獄の花火の照り」と書き、「照
り」を削除し、次の枡目から「反射のやうに」と続ける

34 どこでもいいゝわ！ 此の世の外なら！…「叫んだのである、」に
続けて、「此の世の外な」と書いて、これを鉤括弧（「」）もともに削
除し、次の枡目から「どこでもいいゝわ！ 此の世の外なら！」と
続ける

3 【第二稿】（第一稿へのブルーブラック・インクによる改変・書込）
↓ どうせ苦しむなら暖爐の側で

*この箇所の冒頭、「どうせ」の「ど」を削除し、一字(「同」?)書いた後、これを削除し、「ど」に直し、結局改変せず

4 窓際へ行つたらよくなるだらうと

↓ 窓際へ行けばきつとよくなると

6 話し合つて居る問題なのである。

↓ 話し合つて居る問題の一つなのである。

7 云つて御覧、私の魂さん ↓ ねえ、私の魂さん

8 あすこは暖かいから ↓ あそこはきつと暖かいから

9 あの町は海岸だ。 ↓ あの町は海岸で

11 水もあるしね! ↓ 水もあるしね。

13 静かに暮らすのが ↓ 静かにしてゐるのが

13 あの幸福な國へ住みに行つたらどうだね。

a ↓ あの幸福な國へ行つて住んだらどうだね。

b ↓ あの幸福な國へ行つて住まないかね。

c ↓ あの幸福な國へ行つて住まうとは思はないかい?

d ↓ あの幸福な國へ行つて住まうとは思はないかい。

* aからdへのこの箇所の四回にわたる改変は、第二稿時に同時におこなわれたとも、あるいは時期を違えておこなわれたとも考えられるが、いずれにせよ特定しがたいのでこゝでまとめて示す。なお、cの改変では、上では示さなかったが、まず「あの幸福な國へ行つて住まうとは思はないかね」とした上で、次に「ね」を抹消してこれに代えてすぐ下に「い」と書かれ、「?」が付される。

14 よくほめてゐた國 ↓ よくほめてゐたあの國

15 ロッテルダムはどうだね? ↓ ロッテルダムはどうだね。

16 船が大好きなんだから? ↓ 船が大好きなんだから。

17 私の靈魂は ↓ 私の魂は

18 きつとバタビヤの方が ↓ バタビヤの方が

18 氣に入るかも知れないね。 ↓ 氣に入るかも知れない。

19 ヨーロッパの美があるね。

↓ ヨーロッパの美があるからね。

↓ ヨーロッパの美があるよ。

22 麻痺状態になつてしまつたんだね?

↓ 麻痺状態になつてしまつたのかい?

23 若しさうなら『死』に

↓ そんなになつてゐるのなら、『死』に

23 国へ行かう行かう。 ↓ 国へ逃げて行かう。

*末尾の句点「。」は、左半分がやや塗りつぶされているように見えるが、明確に消されているわけではないので、削除とはとらない

26 もつと遠くへ ↓ いやもつと遠くへ

26 バルチック海の涯まで行かう。 ↓ バルチック海の涯まで行かう。

27 出来ることなら ↓ 出来るなら

28 極地に住まう。 ↓ 北極に住まう。

32 薔薇色の花束を撒き散してくれるだらう。

↓ 薔薇色の花束を送ってくれるだらう。

↓ 薔薇色の花束を送ってくれるだらう。

【第三稿】(第二稿への赤鉛筆による改変・書込)

11 それが映る水…「を」を削除して「が」に改変する際、抹消のため

の二重線が「映」にかかつて「映」も削除された形になっているのを、赤鉛筆で「映」右横に「イキ」と記す(「訳出時改変」参照)

33 賢くもかう叫んだのである、 ↓ 賢くもかう叫んだ、

*この箇所の改変指示は以下の通り…「のである」を二重線で消さず、その右横上下、「のである」の範囲に赤鉛筆で短い横線を引いて

縦長の「x」印をこの範囲全体に及ぶように記し、さらに「x」印に重ねて同じく赤鉛筆で「トル」と記す。ただし、この改変指示を逆に「トル」という指示が「x」印によつて消されている、つまり削除の取消

しと見ることもでき、相反する解釈が可能な曖昧さが残るが、こゝで

は削除指示が重なっておこなわれているととる。

【翻訳最終稿】

(第一稿から第二稿および第三稿での改変を経て成立した)

《ANY WHERE OUT OF THE WORLD》訳詩稿の全文)

ANY WHERE OUT OF THE WORLD (巴里の憂鬱才四十八)

1 人生は一つの病院である。2 そこに居る患者はみんな寝台を換へやうと夢中になつてゐる。3 或るものはどうせ苦しむにしても、せめて暖爐の側でと思つてゐる。4 また或るものは窓際へ行けばきつとよくなると信じてゐる。

5 私はどこか他の處へ行つたらいつも幸福でゐられさうな気がする。6 この轉居の問題こそ、私が年中自分の魂と話し合つて居る問題の一つなのである。

「7 ねえ、私の魂さん、可哀さうな、かじかんだ魂さん、リスボンに住んだらどうだと思ふね? 8 あそこはきつと暖かいからお前は蜥蜴みたやうに元氣になるよ。9 あの町は海岸で、家は大理石造りださうだ。10 それからあの町の人は植物が大嫌ひで、木はみんな引き抜いてしまふさうだ。11 あそこへ行けばお前のお好みの景色があるよ、光と礦物で出来上つた景色だ、それが映る水もあるしね。」

12 私の魂は答へない。

「13 お前は活動してゐるものを見ながら静かにしてゐるのが好きなんだから、オランダへ——あの幸福な國へ行つて住まうとは思はないかい。14 画堂にある繪で見てよくほめてゐたあの國へ行つたら、きつと氣が晴々するよ。15 ロッテルダムはどうだね。16 何しろお前は櫓の林と、家の際に舫つてある船が大好きなんだから。」

17 私の魂はやつぱり黙つてゐる。

「18 バタビヤの方がもつと氣に入るかも知れない。19 その上あそこ

には熱帯の美と結婚したヨーロッパの美があるよ。」

20 一言も言はない。——21 私の魂は死んでゐるのだからか?

「22 ぢやあお前は患らつてゐなければ面白くないやうな麻痺状態になつてしまつたのかい? 23 そんなになつてゐるのなら、『死』にそつくりな國へ逃げて行かう。——24 万事僕が呑み込んでゐるよ、可哀さうな魂さん! 25 トルネオ行きの支度をしやう。26 いやもつと遠くへ——バルチック海の涯まで行かう。27 出来るなら人間の居ないところまで行かう。28 北極に住まう。29 そこでは太陽の光はたゞ斜に地球をかすつて行くだけだ。30 晝と夜との遅い交替が変化を無くしてしまふ、そして單調を——虚無の此の半分を増すのだ。31 そこでは長いこと闇に浸つてゐられる。32 北極光は僕等を樂しませやうと思つて、時々地獄の花火の反射のやうに薔薇色の花束を送つてくれるだらう。」

33 遂に、突然私の魂は口を切つた、そして賢くもかう叫んだ、「34 どこでもいい、わ! 此の世の外なら!」

二二五 一一

【翻訳最終稿と刊行本諸版本との異同】

この翻訳もまた生前の発表はなく、昭和二年の『富永太郎詩集』(私家版)が初出で、それ以降、思潮社版『富永太郎詩集』(昭和五〇年)まで七冊の『詩集』に収録されたが、それぞれ右の翻訳最終稿とは若干の異同が見られることも他の訳詩篇と同様である。以下、翻訳最終稿との異同を、冒頭に掲げた凡例にしたがって示す。

一、『富永太郎詩集』(私家版、昭和二年)

表題: ANY WHERE OUT OF THE WORLD (巴里の憂鬱才四十八)

→ ANY WHERE OUT OF THE WORLD (ポオドレエル)

1 寝台を換へやう ↓ 寝台を換へよう

- 4 また或るものは窓際へ行けば
↓ また或るものは、窓際へ行けば
7 どうだと思ふね? ↓ 何うだと思ふね?
8 あそこはきつと暖かいからお前は
↓ あそこはきつと暖かいから、お前は
11 あすこへ行けばお前の ↓ あすこへ行けば、お前の
18 バタビヤの方がもつと氣に入るかも
↓ バタビヤの方が氣に入るかも
22 ぢやお前は患らつてゐなければ
↓ ぢやお前は患らつてゐなければ
23 『死』にそっくりな国へ逃げて行かう。――
↓ 「死」にそっくりな国へ逃げて行かう――
25 支度をしやう。 ↓ 支度をしよう。
29 太陽の光はたゞ斜に ↓ 太陽の光はただ斜に
25 変化を無くしてしまふ。 ↓ 変化を無くしてしまふ。
30 北極光は僕等を楽しませやうと思つて
32 北極光は僕等を楽しませやうと思つて
↓ 北極光は僕等を楽しませようと思つて
33 そして賢くもかう叫んだ、
↓ そして賢くもかう叫んだのである、
34 どこでもいいわ! ↓ どこでもいいわ!
35 二二・五・一一・ ↓ [削除]
- 二、『富永太郎詩集』(筑摩書房、昭和十六年)
- 表題: ANY WHERE OUT OF THE WORLD (巴里の憂鬱才四十八)
↓ ANY WHERE OUT OF THE WORLD (ポオドレエル)
1 寢台を換へやう ↓ 寢台を換へよう
4 また或るものは窓際へ行けば

- ↓ また或るものは、窓際へ行けば
7 どうだと思ふね? ↓ 何うだと思ふね?
8 あそこはきつと暖かいからお前は
↓ あそこはきつと暖かいから、お前は
11 あすこへ行けばお前の ↓ あすこへ行けば、お前の
18 バタビヤの方がもつと氣に入るかも
↓ バタビヤの方が氣に入るかも
22 ぢやお前は患らつてゐなければ
↓ ぢやお前は患らつてゐなければ
25 支度をしやう。 ↓ 支度をしよう。
29 太陽の光はたゞ斜に ↓ 太陽の光はただ斜に
30 変化を無くしてしまふ。 ↓ 変化を無くしてしまふ。
32 北極光は僕等を楽しませやうと思つて
↓ 北極光は僕等を楽しませようと思つて
33 そして賢くもかう叫んだ、
↓ そして賢くもかう叫んだのである、
34 どこでもいいわ! ↓ どこでもいいわ!
35 二二・五・一一・ ↓ [削除]
- 三、『富永太郎詩集』(創元社、創元選書、昭和二十四年)
- 翻訳最終稿との異同は、次の二点を除いて、筑摩書房版『富永太郎詩集』と同じ。
3 せめて暖爐の側で ↓ せめて煖爐の側で

35 二二・五・一一、↓一九二二・五・一一

四、『富永太郎詩集』（創元社、創元文庫、昭和二十六年）

翻訳最終稿との異同は、次の四点を除いて、筑摩書房版『富永太郎詩集』と同じ。

3 せめて暖爐の側で ↓ せめて煖爐の側で

22 ぢやあお前は患らつてゐなければ

↓ ぢやあお前は、患らつてゐなければ

26 バルチック海の涯まで ↓ バルチック海の涯まで

35 二二・五・一一、↓一九二二・五・一一

したがって、創元文庫版は創元選書版と、22文と26文の二点で相違がある。

五、『定本 富永太郎詩集』（中央公論社、昭和四十六年）

表題：ANY WHERE OUT OF THE WORLD (田里の憂鬱才四十八)

↓ ANY WHERE OUT OF THE WORLD

ボードレール

*改行されて二行に

1 寝台を換へやう ↓ 寝台を換へよう

3 せめて暖爐の側で ↓ せめて煖爐の側で

11 あすこへ行けばお前の ↓ あすこへ行けば、お前の

22 ぢやあお前は患らつてゐなければ

↓ ぢやあお前は患らつてゐなければ

23 『死』にそっくりな国へ逃げて行かう。――

↓ 『死』にそっくりな国へ逃げて行かう――

25 支度をしやう。 ↓ 支度をしよう。

29 太陽の光はたゞ斜に ↓ 太陽の光はただ斜に

35 二二・五・一一、↓ [削除]

六、『富永太郎詩集』（求龍堂、昭和四十七年）

翻訳最終稿との異同は、中央公論社版と同じ。

七、『富永太郎詩集』（現代詩文庫、思潮社、昭和五十年）

漢字がすべて新字体に統一されていることと、次の一点を除き、中央公論社版と異同は同じ。

33 私の魂は口を切つた、そして賢くもかう叫んだ、
↓ 私の魂は口を切つた。そして賢くもかう叫んだ、

IV 《午前一時に》訳詩稿の成立

《発表誌》なし

《初出》『富永太郎詩集』（昭和二年、私家版）

《翻訳草稿》資料番号 40166

《用紙》原稿用紙「東京 文房堂製」（二五字×二〇行）三枚

《筆記用具》ペン（ブルーブラックインク、訂正の一部はブルーインクも使用）、赤鉛筆

《註記》原稿用紙一枚目一行目、三字下げで表題「午前一時に」、四桁分空けて「（未定稿）」、さらに二桁分空けて「ボードレール」二行目は空白行とし、三行目から一字下げで本文が始められ、途中改行が三回おこなわれ、四節よりなる原詩と同様、四段落で訳文を構

成する。

訳稿末尾、原稿用紙三枚目右面左側中央（七行目から九行目の十一
枅・十二枅の範囲）に、本文と同じブルーブラックインク・ペンで横
書きにして「Aout 1923.」（一九二三年八月）と日付が記されている。
改変箇所のは多くは、二重線などを引いて抹消された語句の右側に、
ペン書きで訂正・加筆。

三枚の原稿用紙右上（二行目上）にアラビア数字で、それぞれ「1」、
「2」、「3」と番号を付す。

【第一稿】

午前一時に

（未定稿）

ボオドレエル

1とうとう獨りになれた！ 2聞えるものはのろくさい疲
れきつた辻馬車の響ばかり。3暫くは静寂が得られるのだ
、安息とは行かないまでも。

4暴虐をほしいまゝにした人間の顔もとうとう消え失せた
、俺を悩ますものはもう俺自身ばかりだ。

5やつと俺にも闇に浸つて疲を休めることが許されたの
だ！ 6まづ、扉の鍵を二度廻はす。7かうして鍵をまはす
と、俺の孤獨が増すやうだ。8現在この世から俺を隔て、
ある城壁が固くなるやうだ。

9怖ろしい生活だ！ 10怖ろしい都會だ！ 11今日一日にし
たことを数へ上げてみようか。12文士に五六人會つた

。13その一人は俺に陸を通つてロシアへ行けるだらうかと
訊くんだ（あの男はきつとロシアを島だと思つてゐるにち
がひない）。14或る新聞の主筆を手ひどくやつつけた。15あい
つはいひわけをするたんびに「何しろこゝは立派な人

たちがやつてゐるのですから」と言つたつけ。16ほかの新聞
はみんなならずものが書いてゐるといふつもりなのだ。17二
十人ばかりの人にお辞儀をした。18そのうち十五人は知ら
ない人だ。19同じくらゐの割合で萬遍なく握手をした。20そ
れも、手袋を買ふときほども身を入れないで。21驟雨のあ
ひだ隙つぶしに踊り子のところに上りこんで、ズニ

ユストルの衣裳図案を描いてくれと頼まれた。22劇場の支
配人のところへ敬意を表しに行つたら、俺に暇を出すと
言ひ渡してこんなことを言つた、「23Zのところへ行つてみ
たらいゝでせう。24あの男はこゝの作者のなかでも一ばん
ぐずで、一ばん馬鹿で、一番評判がいゝんだから、あ

すこへ行つたら何とかなるでせう。25まあ會つてごらん
さい、また會ひませう。」26俺のしたこともない悪事を自慢
して話した（なぜなんだらう？）。27それでゐて、喜んでや
つてしまつたほかのわるさは卑怯にも否定してしまつた。

28見え坊から出た咎だ、世間への氣兼ねから出た罪だ。
29或る友人に譯もない用事をしてやるのを拒んで、根っ
から下らない男に推薦状を書いてやつた。30あゝあゝ、そ
れもすつかりおしまひか。

31何にも満足のできない、俺自身にも満足のできない俺
は、夜の静寂と孤獨の中ですつかり自分のからだになつ
て少しいゝ氣にならして貰ひたい。32俺の愛した奴らの魂
よ、俺の歌つたやつらの魂よ、俺を護つてくれ、俺を支
へてくれ、いつはりとこの世の瘴氣とを俺から遠ざけて
くれ。33それから、あなたは、あゝ神よ、私が一ばん劣等な
人間でないことを證するために、私が自分の輕蔑した
人たちにも劣つたものでないことを証す

のために、恵を垂れて私に數篇のよき詩を書くことを許

34 したまへ。

Août 1923.

【訳出時改変・註記】

- 3 安息とは行かない…「休」を一部書きかけて削除し、右横に「安」と書いて「安息」とする
- 4 暴虐をほしいまゝにした人間の顔もとうとう消え失せた…「とうとう人間の暴政も消え」と書き、「人間の」の次に「顔の」を挿入して「人間の顔の暴政」とした後、「とうとう人間の顔の暴政も消え」全体を削除し、次の行からあらためて「暴虐をほしいまゝにした人間の顔もとうとう消え失せた」とする
- 4 人間の顔…「人」に続けて一字（不明）書きかけて消し、右横に「間」と書いて「人間」とする
- 5 許されたのだ…「許されたのだ。」と句点で文を閉じた後、句点を感じ嘆符に換えて「許されたのだ！」とし、次の柁を空白にして次の文に続ける（この改変は第二稿時のものと見ることもできるが、空白柁の存在は初稿時の改変を示唆している）
- 9 怖ろしい生活だ！…「怖」に続けて一字（不明）書きかけて消し、右横に「ろ」と書いて「しい」と続け、「怖ろしい」とする。また、「怖ろしい生活だ。」と句点で文を閉じた後、句点を感じ嘆符に換えて「怖ろしい生活だ！」とし、次の柁を空白にして次の文に続ける（これを初稿時改変とすることについては前項5の註記を参照）
- 10 怖ろしい都會だ！…前文の次の柁目に一字（おそらく「怖」）書きかけて消し、一字分空白として、その次の柁目から「怖ろしい都會」

と書く

- 11 数へ上げてみやうか…「数へ」に続けて「立て」と書いて「数へ立て」とし、これを削除して次の柁目から「上げて」と書いて「数へ上げてみやうか」とする
- 13 その一人…「その」に続けて一字（不明）書きかけて消し、右横に「一」と書いて「人」に続け、「一人」とする
- 16 書いてある…「て」が脱落しているが、訳稿表記のまま示す
- 21 驟雨のあひだ隙つぷしに…「あひだ」の次の柁に一字（不明）書きかけて消し、そのまま次の柁に「隙」と続ける
- 21 踊り子のところに上りこんで、ズニユストル…「上りこんで」に続けて「ゐた」と書いた後、これを削除し、「上りこんで」の次の柁目に読点「、」が打たれ、「ズニユストル」と続ける
- 24 一ばん馬鹿で、一番評判がいゝ…「馬鹿で、」に続けて一字（不明）書きかけて消し、削除の二重線が次の柁目まで伸びて二柁二字分空きとして、次の「一番」に続ける
- 26 （なぜなんだらう？）…「（」に続けて「何」と書きかけて消し、次の柁目から「なぜなんだらう？」
- 29 用事をしてやるのを拒んで、…「拒んだ」と書いて、「だ」を削除し、次の柁目に「で」と書いて続ける
- 33 自分の軽蔑した人たち…「軽蔑したもの」と書いて、「もの」を削除し、次の柁目に「人」と書いて続ける
- 33 人たちにも劣つたものでない…「人たちにも」に続けて、「及ば」と書きかけて、「ば」を一部書いたところで「及ば」全体を削除し、「劣つてゐる」と続けた後、「つてゐる」を削除し、右横に「つ」と書き、「つてゐる」と書いた次の柁目に「たものでない」と書いて続ける
- 33 数篇のよき詩…「数篇」に続けて一字（不明）書きかけて消し、右横に「の」と書いて次の柁目から「よき詩」と続ける

【第二稿】(第一稿へのブルーブラック・インクによる改変・書込)

1 とうとう獨りに ↓ やつと獨りに
6 鍵を二度廻はす ↓ 鍵を二度まはす

14 やつつけた…「た」を削除した後、その右横に「た」と書き、結局改変はおこなわれず

21 上りこんで、ズニユストル
↓ 上りこんでゐたら、ズニユストル

24 一番評判がいゝ ↓ 一ばん評判がいゝ

25 まあ會つてごらんなさい ↓ まあ行つてごらんなさい

25 また會ひませう。 ↓ なほ考へてみませう。

27 喜んでやつてしまつたほかのわるさ、

↓ 喜んでやつたほかのわるさ

28 見え坊から出た咎だ。 ↓ 見え坊から出た咎だ、

31 俺自身にも満足のできない ↓ 自分にも満足のできない

31 少しいゝ氣にならして貰ひたい。

↓ 少しいゝ氣になりたいのだ。

33 恵を垂れて私に數篇のよき詩を書くことを許したまへ。

↓ 私に數篇のよき詩を書くことを許させたまへ。

【第三稿】(第三稿への赤鉛筆による改変・書込)

12 文士に五六人會つた ↓ 五六人の文士に會つた。

*「文士に五六」の右横に語句入替えを指示する校正記号を付し、「人」と「會」の間の右横に「の」が書かれて「人」の後に「の」が来るように指示されているが、挿入記号は付けられていない

13 陸を通つて ↓ 陸路を通つて

*「を」の右横に「路」が書かれ、「陸」の後に「路」が来るように指示されているが、挿入記号は付けられていない

13 思つてゐるにちがひない ↓ 思つてゐたにちがひない

*これに先立つ「あの男はきつとロシアを島だと」の「きつと」の右横に赤鉛筆で傍線が引かれているが、削除・挿入等改変指示はないので、この箇所については改変なしとみなす

14 或る新聞…「新聞」の右横に「雑誌」と書かれたが、同じ赤鉛筆で削除されており、結局改変はなされていない

16 ならずものが書いゐる ↓ ならずものがやつてゐる

*「書い」は削除されず残されたまま、その右横に「やつて」と書かれ、「ゐる」に接続するようになっており、削除・改変が明確ではないが、「やつてゐる」に換えられたととる

21 驟雨のあひだ隙つぶしに…「隙」の右横に「？」が付されているが、削除・改変はおこなわれていないため、訂正なしととる

*検討すべきこととして疑問符が付されたと考えられるが、削除等改変指示はないので、このままの形で示す

24 一ばんぐずで、 ↓ 一ばんぐづで、

25 なほ考へてみませう。

↓ それからまた會ひませう。

↓ そしてまた會ひませう。

26 俺のしたこともない悪事 ↓ 俺はしたこともない汚行

*「俺の」から「俺は」、「悪事」から「汚行」、いずれの改変においても訂正される字句は削除されず残されたまま、それぞれの右横に訂正字句が書かれ、後続するようになっており、削除・改変が明確ではないが、赤鉛筆によつて改変がおこなわれたとする。また「悪事」の左横に「？」が付されているが、削除・改変はないため、訂正なしとする

30 あゝあゝ、それもすつかりおしまひか。

↓ ウフツ、それですつかりおしまひかい？

↓ ウフツ、それもすつかりおしまひかい？

* この改変においても、訂正される字句は削除されず残されたまま、その右横に訂正字句が書かれ、削除・改変が明確とはいえないが、赤鉛筆による改変とする

31 何にも満足できない ↓ 何人にも満足できない

32 俺を護ってくれ、↓ 俺を強くしてくれ、

* この改変においても、訂正される字句は削除されず残されたまま、その左横に訂正字句が書かれ、削除・改変が明確ではないが、赤鉛筆による改変をとる

33 あなたは ↓ あなた

* 「あなたは」の「は」の右横にチェック記号が付され、とくに削除・加筆等の指示はないが、原文文意からこれを削除の指示とする（以下、語句にコの字型で傍線がほどこされた箇所も同様の指示とする）

33 あゝ神よ ↓ あゝ主なる神様！

33 劣等な人間でないことを證するために、私が自分の軽蔑した

↓ 劣等な人間でないことを、自分の軽蔑した

* 「證するために」と「私が」の範囲の右横に、傍線を引くようにコの字型の記号をこの箇所^{あかし}に付し、とくに削除・加筆等の指示はないが、前項と同様に、原文文意からこれを削除の指示とする

33 劣つたものでないことを証する

↓ 劣つたものでないことを私自身に証する

33 証するために、私に數篇のよき詩を書くことを許されたまへ。

↓ 証するために、數篇のよき詩を書くことを許したまへ。

* 「私に」の範囲の右横に、傍線を引くようにコの字型の記号をこの箇所^{あかし}に付し、とくに削除・加筆等の指示はないが、やはり同様に原文文意からこれを削除の指示とする

* 許されたまへ↓許したまへ…第二稿で「し」の右横に「させ」と書かれ、「許したまへ」から「許されたまへ」へ改変がおこなわれたが、第三稿では、「させ」は消されず残されたまま、削除された「し」の

左横に新たに「し」が赤鉛筆で書かれており（「レ」とも読め、再考すべき箇所を示すともとれる）、判断に迷うが、第一稿に戻して「許したまへ」としたとする

【第四稿】（第三稿へのブルー・インクによる改変）

表題 午前一時に （未定稿） ポオドレエル

↓ 午前一時に（巴里の憂鬱才十）

* 最初の表記「午前一時に」（未定稿） ポオドレエル」に

は一字も削除などをおこなわず、「午前一時に」の次の柘目の右横欄外から下にブルーインクで「（巴里の憂鬱才十）」と書き入れられている。この表題の改変がいつおこなわれたか、赤鉛筆による改変との先後はどうか、などについては決定しがたいが、ほかの散文詩訳詩稿への書き入れとも勘案し、訳稿への改変・訂正などがおこなわれた上で表題表記の統一が試みられたと見て、最終稿の段階の改変とみなす。

【翻訳最終稿】

（第一稿から第二稿・第三稿・第四稿での改変を経て成立した
《午前一時に》訳詩稿の全文）

午前一時に（巴里の憂鬱才十）

1 やつと獨りになった！ 2 聞えるものはのろくさい疲れきつた
辻馬車の響ばかり。3 暫くは静寂が得られるのだ、安息とは行かない
までも。4 暴虐をほしきまゝにした人間の顔もとうとう消え失せた、
俺を悩ますものはもう俺自身ばかりだ。

5 やつと俺にも闇に浸って疲を休めることが許されたのだ！ 6
まづ、扉の鍵を二度まはす。7 かうして鍵をまはすと、俺の孤獨が増
すやうだ。8 現在この世から俺を隔てゝゐる城壁が固くなるやうだ。
9 怖ろしい生活だ！ 10 怖ろしい都會だ！ 11 今日一日にしたこ

とを数へ上げてみやうか。12五六人の文士に會つた。13その一人は俺に陸路を通つてロシアへ行けるだらうかと訊くんだ(あの男はきつとロシアを島だと思つてゐたにちがひない)。14或る新聞の主筆を手ひどくやつつけた。15あいつはいひわけをするたんびに「何しろこゝは立派な人たちがやつてゐるのですから」と言つたつて。16ほかの新聞はみんなならざるものがやつてゐるといふつもりなのだ。17二十人ばかりの人にお辞儀をした。18そのうち十五人は知らない人だ。19同じくらゐの割合で萬遍なく握手をした。20それも、手袋を買ふときほども身を入れないで。21驟雨のあひだ隙つぶしに踊り子のところを上りこんでゐたら、ゼニユストルの衣裳図案を描いてくれと頼まれた。22劇場の支配人のところへ敬意を表しに行つたら、俺に暇を出すと言ひ渡してこんなことを言つた、「23Zのところへ行つてみたらいゝでせう。24あの男はこゝの作者のなかでも一ばんぐづで、一ばん馬鹿で、一ばん評判がいゝんだから、あすこへ行つたら何とかなるでせう。25まあ行つてごらんさい、そしてまた會ひませう。」26俺はしたこともない汚行を自慢して話した(なぜなんだらう?)。27それでゐて、喜んでやつたほかのわるさは卑怯にも否定してしまつた。28見え坊から出た咎だ、世間への氣兼ねから出た罪だ。29或る友人に譯もない用事をしてやるのを拒んで、根つから下らない男に推薦状を書いてやつた。30ウフツ、それもすつかりおしまひかい?

31何人にも満足のできない、自分にも満足のできない俺は、夜の静寂と孤獨の中ですつかり自分のからだになつて少しいゝ氣になつたのだ。32俺の愛した奴らの魂よ、俺の歌つたやつらの魂よ、俺を強くしてくれ、俺を支へてくれ、いつはりこの世の瘴氣とを俺から遠ざけてくれ。33それから、あなた、あゝ主なる神様! 私が一ばん劣等な人間でないことを、自分の輕蔑した人たちにも劣つたものでないことを私自身に証するために、數篇のよき詩を書くことを許したまへ。

34

Août 1923.

【翻訳最終稿と刊行本諸版本との異同】

この翻訳もまた生前の発表はなく、昭和二年の『富永太郎詩集』(私家版)が初出で、それ以降、思潮社版『富永太郎詩集』(昭和五〇年)まで七冊の『詩集』に収録されたが、それぞれ右の翻訳最終稿とは若干の異同が見られることも他の訳詩篇と同様である。以下、翻訳最終稿との異同を、冒頭に掲げた凡例にしたがつて示す。

一、『富永太郎詩集』(私家版、昭和二年)

表題…午前一時に(巴里の憂鬱才十)

↓ 午前一時に(ポオドレル)

4 暴虐をほしにまゝにした ↓ 暴虐をほしにまゝにした

8 俺を隔てゝゐる城壁 ↓ 俺を隔ててゐる城壁

11 数へ上げてみやうか。 ↓ 数へ上げてみようか。

12 五六人の文士に會つた。 ↓ 文士に五六人會つた。

13 陸路を通つてロシアへ行けるだらうかと訊くんだ(あの男は

↓ 陸路を通つてロシアへ行けるだらうかと訊くんだ、(あの男は

13 ロシアを島だ ↓ ロシアを島だ

15 こゝは立派な人たちがやつてゐる

↓ こゝは立派な人たちがやつてゐる

21 驟雨のあひだ隙つぶしに ↓ 驟雨のあひだ、ひまつぶしに

23 行つてみたらいいでせう。 ↓ 行つてみたらいいでせう。

- 24 こゝの作者のなかでも ↓ この作者のなかでも
 24 一ばん評判がいゝんだから、 ↓ 一ばん評判がいいんだから、
 25 まあ行つてごらんなさい、そしてまた會ひませう。
 ↓ まあ行つてごらんなさい、また會ひませう。
 26 俺はしたこともない汚行を自慢して話した
 ↓ 俺のしたこともない悪事を自慢して話した
 30 ウフツ、それもすつかりおしまひかい？
 ↓ あゝあゝ、それもすつかりおしまひか。
 31 何人にも満足のできない ↓ 何にも満足のできない
 31 少しいゝ氣になりたい ↓ 少しいゝ氣になりたい
 32 俺を強くしてくれ、 ↓ 俺を護つてくれ。
 33 あなた、あゝ主なる神様！ ↓ あなたは、あゝ神よ、
 33 私が一ばん劣等な人間でないことを、自分の軽蔑した人たちにも
 劣つたものでないことを私自身に証^{あかし}するために、數篇のよき詩を書
 くことを許したまへ。
 ↓ 私が一ばん劣等な人間でないことを證^{あかし}するために、私が自分の
 軽蔑した人たちにも劣つたものでないことを證^{あかし}するために、私に數
 篇のよき詩を書くことを許させたまへ。
 34 Aout 1933. [横書き] ↓ [削除]
- 二、『富永太郎詩集』（筑摩書房、昭和十六年）
- 表題：午前一時に（巴里の憂鬱才十）
 ↓ 午前一時に（ポオドレエル）
 4 暴虐をほしいまゝにした ↓ 暴虐をほしいまゝにした
 8 俺を隔てゝゐる城壁 ↓ 俺を隔ててゐる城壁
 11 数へ上げてみやうか。 ↓ 数へ上げてみようか。
 12 五六人の文士に會つた。 ↓ 文士に五六人會つた。

- 13 陸路を通つてロシアへ行けるだらうかと訊くんだ（あの男は
 ↓ 陸を通つてロシアへ行けるだらうかと訊くんだ、（あの男は
 13 ロシアを島だ ↓ ロシアを島だ
 15 こゝは立派な人たちがやつてゐる
 ↓ こゝは立派な人たちがやつてゐる
 21 驟雨^{にはかめ}のあひだ隙^{にはかめ}つふしに ↓ 驟雨のあひだ、ひまつぶしに
 23 行つてみたらいいでせう。 ↓ 行つてみたらいいでせう。
 24 こゝの作者のなかでも ↓ ここの作者のなかでも
 24 一ばん評判がいゝんだから、 ↓ 一ばん評判がいいんだから、
 25 まあ行つてごらんなさい、そしてまた會ひませう。
 ↓ まあ行つてごらんなさい、また會ひませう。
 26 俺はしたこともない汚行を自慢して話した
 ↓ 俺のしたこともない悪事を自慢して話した
 30 ウフツ、それもすつかりおしまひかい？
 ↓ あゝあゝ、それもすつかりおしまひか。
 31 何人にも満足のできない ↓ 何にも満足のできない
 31 少しいゝ氣になりたい ↓ 少しいゝ氣になりたい
 32 俺を強くしてくれ、 ↓ 俺を護つてくれ。
 33 あなた、あゝ主なる神様！ ↓ あなたは、あゝ神よ、
 33 私が一ばん劣等な人間でないことを、自分の軽蔑した人たちにも
 劣つたものでないことを私自身に証^{あかし}するために、數篇のよき詩を書
 くことを許したまへ。
 ↓ 私が一ばん劣等な人間でないことを證^{あかし}するために、私が自分の
 軽蔑した人たちにも劣つたものでないことを證^{あかし}するために、私に數
 篇のよき詩を書くことを許させたまへ。
 34 Aout 1933. [横書き] ↓ [削除]

以上のように、翻訳最終稿と筑摩書房版『富永太郎詩集』との異同

は、私家版『富永太郎詩集』と同じである。

三、『富永太郎詩集』（創元社、創元選書、昭和二十四年）

翻訳最終稿との異同は、次の四点を除いて、筑摩書房版『富永太郎詩集』と同じ。

- 20 手袋を買ふときほども身を入れないで、
- ↓ 手袋を買ふときほども身を入れないで、
- 25 まあ行つてごらんなさい、そしてまた會ひませう。
- ↓ まあ行つてごらんなさい。また會ひませう。
- 33 あゝ主なる神様！ ↓ ああ神よ
- 34 Août 1923. [横書き] ↓ 一九二三・八

四、『富永太郎詩集』（創元社、創元文庫、昭和二十六年）

翻訳最終稿との異同は、次の五点を除いて、筑摩書房版『富永太郎詩集』と同じ。

- 13 ロシアへ行けるだらうかと訊くんだ（あの男は
- ↓ ロシアへ行けるだらうかと訊くんだ。（あの男は
- 20 手袋を買ふときほども身を入れないで、
- ↓ 手袋を買ふときほども身を入れないで、
- 25 まあ行つてごらんなさい、そしてまた會ひませう。
- ↓ まあ行つてごらんなさい。また會ひませう。
- 33 あゝ主なる神様！ ↓ ああ神よ
- 34 Août 1923. [横書き] ↓ 一九二三・八

したがって、創元文庫版は創元選書版と、13文の二点で相違がある。

五、『定本 富永太郎詩集』（中央公論社、昭和四十六年）

表題…午前一時に（巴里の憂鬱才十）

↓ 午前一時に

ボードレール

- 11 数へ上げてみようか。 ↓ 数へ上げてみようか。
- 33 あなた、あゝ主なる神様！ ↓ あなたは、あゝ主なる神様！
- 33 数篇のよき詩を書くことを許したまへ。
- ↓ 数篇のよき詩を書くことを許されたまへ。
- 34 Août 1923. [横書き] ↓ [削除]

六、『富永太郎詩集』（求龍堂、昭和四十七年）

翻訳最終稿との異同は、次の一点を除いて、中央公論社版と同じ。

- 4 人間の顔もとうとう消え失せた
- ↓ 人間の顔もとうとう消え失せた

七、『富永太郎詩集』（現代詩文庫、思潮社、昭和五十年）

漢字がすべて新字体に統一されていることと、次の一点を除き、中央公論社版と異同は同じ。

- 4 人間の顔もとうとう消え失せた
- ↓ 人間の顔もたうたう消え失せた

V 《藝術家の告白祈禱》コンフィテオール 訳詩稿の成立

《発表誌》 なし

《初 出》 『富永太郎詩集』（昭和二年、私家版）

《翻訳草稿》 資料番号 40168

《用 紙》 原稿用紙（二〇字×二〇行）二枚。原稿用紙は製造元不明、左下に縦書きで「拾行 廿詰」、横書きで「(68)」、中央上右寄りに番号記入欄があり

《筆記用具》 ペン（ブルーブラックインク、ブルーインク）、鉛筆、赤鉛筆

《註 記》 原稿用紙一行目、三字下げで表題「藝術家の告白祈禱」^{コンフィテオール}（巴里の憂鬱オ三）。「ルビ「コンフィテオール」は「祈禱」に付されている」。「（巴里の憂鬱オ三）」は、「藝術家の告白祈禱」とは別のブルーインクペンによる後からの加筆。

二行目は空白行とし、三行目から一字下げで本文。途中、改行が三回おこなわれ、四節よりなる原詩と同様、四段落で訳文を構成する。本文は、原稿用紙一枚目右面と左面の二冊目まで、すなわち、表題から第二節途中（第七文）までペン書き（ブルーブラックインク）、それ以降は鉛筆書き。

翻訳中のこうした筆記具の変更は、ほかのボードレール翻訳稿においては改変時以外は見られないが、訳文とその改変様態から見て、いったんペン書きで途中まで翻訳した後、中断され、その後、ペン書きではなく、鉛筆書きで翻訳が継続されたと考えられる。

改変箇所は、本文と同じブルーブラックインクのペンまたは鉛筆で二重線または三重線などを引いて抹消された語句の右側に訂正・加筆。他に赤鉛筆による改変も五箇所ある。ただし、鉛筆で改変後、その上からブルーブラックインクのペンでなぞるように、同じ文字・改変記号を重ね書きしている箇所もあり、また、鉛筆で改変後、その上から赤鉛筆で同じ改変記号を重ね書きしている箇所もある。

以上の翻訳・改変様態から、翻訳稿作成と改変作業について、次のような六段階の過程を想定することができる。

① ペン書きで途中まで翻訳し、中断（改変は一箇所）

② 鉛筆書きで既訳部分を推敲・改変の上、中断箇所以降を翻訳

③ 鉛筆書きで全体の推敲・改変

④ ペン書きでペン書き部分の推敲・改変、合わせてこの部分の鉛筆書きでの改変部分をペンで上から重ね書き

⑤ 赤鉛筆書きで全体の推敲・改変

⑥ ブルーインクペン書きで、表題「藝術家の告白祈禱」^{コンフィテオール}に続けて「（巴里の憂鬱オ三）」を付加

こうした翻訳稿作成過程を考慮して、この翻訳稿に限り、①の訳稿を「第一稿」、②の訳稿を「第二稿」とし、最初の翻訳稿として「第一稿」・「第二稿」をともに示し、改変についてもそれぞれの訳稿について記述することにする。「翻訳最終稿」については、これまでと同じように、すべての改変がおこなわれた後の訳稿（右の過程でいえば⑥を経た訳稿）を示す。

末尾に日付なし。

【第一稿】

藝術家の告白 祈禱^{コンフィテオール}

1 秋の日の暮方は何と身に沁み入ることだ。
2 苦しいほどに身に沁みる。3 何故と言つて、臃ろげではあるが強さに事欬かぬ或るえも言はれぬ感覚があるものだから。4 また、「無窮」の刃くらゐ鋭い刃はないものだから。

5 空と海との無限の中にわが眼を溺らせる楽しさ！ 6 孤獨、沈黙、蒼空の類ない純潔！

7 地平線上にぶるぶると顫へてゐる小さな白帆、

【訳出時改変】

7 地平線上にぶるぶると顫へてゐる…「ぶるぶると」に続けて一字（不明、おそらく「慄」）書きかけて消し、その次の桁目から「顫へてゐる」と書く

【第二稿】

藝術家の告白 祈禱
コンフィテオール

1 秋の日の暮方は何と身に沁み入ることだ。
2 苦しいほどに身に沁みる。3 何故と言つて、臚ろげではあるが強さに事歛かぬ、えも言はれぬ或る感覚があるものだから。4 また、「無窮」の刃くらゐ鋭い刃はないものだから。

5 空と海との無限の中にわが眼を溺らせる味ひ！ 6 孤獨、沈黙、蒼空の類ない純潔！

7 地平線上にぶるぶると顫へ

ながら、その微少と孤獨とでもはや如何ともしがたい私の生活を眞似てゐる白帆、

また、波の單調な旋律、これらすべてのものは私に依つて思考してゐる。8 もしくは、私が

それらのものに依つて思考してゐる（といふのは、夢想の宏大さの中では、「われ」は速かに消

失するものだ！）。9 かれらは思考する、と私は

言ふ、然しながら、音楽的に、繪画的に、理

屈拔きに、三段論法も、演繹法も無しにだ。

10 これらの想念は、私から出るか、もしくは

物象から逸出する毎に、必ず、あまりに強烈になる。11 快樂中に存するエネルギーが、一種の不快、一種の積極的な苦惱を創り出す。

12 あまりに張りきつた私の神経は、かん高い、苦しげな顫動をするのみだ。

13 今や空の深さが私を自失せしめる。14 空の透明さが私をいらさらせる。15 海の不感無覺、風景の不動が私を裏切る。16 あゝ、いつまでも悩まなければならぬのか。17 いつまでも美から逃れなければならぬのか。18 自然よ、無情の魔女よ、恆に勝ちほこつた敵よ、私を放してくれ。19 私の願望と私の誇りとを唆かすのを止めてくれ！ 20 美の研究は一つの決闘だ、そこに藝術家は、打ち敗かされる前に怖れの叫びを挙げてゐる。

【第二稿時改変】（鉛筆による第一稿への訂正および第二稿訳出時改

変…第一稿に鉛筆書きで改変後、別の改稿時に、上からさらにブルー

ブラックインク・ペンで重ね書きしている箇所には末尾に（＋）、赤

鉛筆で重ね書きしている箇所には末尾に（＋＋）を、それぞれ付す）

3 強さに事歛かぬ或るえも言はれぬ感覚がある

↓ 強さに事歛かぬ、えも言はれぬ或る感覚がある（＋）

5 わが眼を溺らせる楽しさ！ ↓ わが眼を溺らせる味ひ！（＋）

7 地平線上にぶるぶると顫へてゐる小さな白帆

↓ 地平線上にぶるぶると顫へ（＋＋）

* 「顫へてゐる小さな白帆」の「てゐる小さな白帆」を鉛筆で縦線を引いて削除し（のちに赤鉛筆でこれに縦線を重ね書き）、消された「帆」の次の桁目から新たに鉛筆書きで「ながら」と続けて、「顫へながら」

とする

7 その微少と孤獨とでもはや如何ともしがたい私の生活を眞似てゐる白帆…「その微少と孤獨とで」に続けて「私の」と書いて、これを削除し、次の柀目から「もはや如何ともしがたい」と書いて「私の」に続け、「その微少と孤獨とでもはや如何ともしがたい私の生活」とする

10 必ず、あまりに強烈になる。…「必ず、」に続けて「直ちに強」と書いて、これを削除し、右横に「あまりに」と書き、次の柀目から「強烈になる。」と書いて、「必ず、あまりに強烈になる。」とする
11 一種の積極的な苦惱…「積極的な」に続けて「惱」の一部を書いて、これを削除し、次の柀目から「苦惱」と書いて、「積極的な苦惱」とする

【第三稿】（第二稿への鉛筆による訂正）

7 その微少と孤獨 ↓ その微小と孤獨

7 私の生活を眞似てゐる白帆

↓ 私の生活をかたどつてゐる白帆、

10 これらの想念は、私から出るか、

↓ これらの想念は、私から生ずるか、

10 物象から逸出する毎に、 ↓ 物象から逸出するや否や、

14 私をいらいらさせる。 ↓ 私をいら立たせる。

15 海の不感無覺 ↓ 海の感感覺

* 「不感無覺」の「不」の削除、「無」の「感」への置き換えでは「感感覺」となり、意味をなさないが、そのまま放擲されたとする（なお、第五稿で「無感覺」となる）

18 私を放してくれ。 ↓ 私を放してくれ！

20 怖れの叫びを挙げてゐる。 ↓ 怖れの叫びを挙げてゐるのだ。

【第四稿】（第三稿へのブルーブラックインクによる改変）

2 苦しいほどに ↓ 苦しいまでに

3 強さに事歛かぬ ↓ 強さには事歛かぬ

【第五稿】（第四稿への赤鉛筆による改変）

8 速かに消失するものだ！ ↓ 速かに消失するからだ！

* 「もの」の右横に「から」と書かれているだけで削除・加筆等の指示はないが、「もの」を削除し「から」に改変とする

9 私は言ふ、然しながら、

↓ 私は言ふ、それは然しながら、

* 「然しながら、」の「ら、」右横に挿入のような記号を付して「それは」と書き、「然しながら」の範圍の右横には傍線を引いて最上部に短い横線を付す。ほかの赤鉛筆による改変の場合とおなじく、「然しながら」に削除指示はおこなわれていない。「然しながら」に付された傍線と挿入記号のような指示をどう解するか、何通りかの見方が可能で決定は容易ではないが、ここでは、いったん「然しながら」の後に挿入された「それは」が、「然しながら」の前に挿入する改変がおこなわれたととる。

11 一種の積極的な苦惱 ↓ 一種の確實な苦惱

* 「積極的」の右横に「確實」と書かれているだけで削除・加筆等の指示はないが、「積極的」を削除し「確實」に改変とする

15 海の不感無覺 ↓ 海の無感覺

【第六稿】（第五稿へのブルーインクによる改変）

表題 藝術家の告白 コンフィテオル

↓ 藝術家の告白 コンフィテオル 祈禱（巴里の憂鬱オ三）

* 「（巴里の憂鬱オ）」に続けて「七」と書いて消し、その次の柀目に「三」と書く

【翻訳最終稿】

(第一稿から第六稿までの改変を経て成立した《藝術家の告白

祈 禱》訳詩稿の全文)

藝術家の告白 祈 禱 (コンフィテアール) (巴里の憂鬱才三)

1 秋の日の暮方は何と身に沁み入ることだ。2 苦しいまでに身に沁みる。3 何故と言つて、臆ろげではあるが強さには事欲かぬ、えも言はれぬ或る感覚があるものだから。4 また、「無窮」の刃くらゐ鋭い刃はないものだから。

5 空と海との無限の中にわが眼を溺らせる味ひ！ 6 孤獨、沈黙、蒼空の類ない純潔！ 7 地平線上にぶるぶると顫へながら、その微小と孤獨とでもはや如何ともしがたい私の生活をかたどつてゐる白帆、また、波の單調な旋律、これらすべてのものは私に依つて思考してゐる。8 もしくは、私がそれらのものに依つて思考してゐる(といふのは、夢想の宏大さの中では、「われ」は速かに消失するからだ！)。9 かれらは思考する、と私は言ふ、それは然しながら、音楽的に、絵画的に、理屈抜きに、三段論法も、演繹法も無しにだ。

10 これらの想念は、私から生ずるか、もしくは物象から逸出するや否や、必ず、あまりに強烈になる。11 快楽中に存するエネルギーが、一種の不快、一種の確實な苦惱を創り出す。12 あまりに張りきつた私の神経は、かん高い、苦しげな顫動をするのみだ。

13 今や空の深さが私を自失せしめる。14 空の透明さが私をいら立たせる。15 海の無感覚、風景の不動が私を裏切る。16 あゝ、いつまでも悩まなければならぬのか。17 いつまでも美から逃れなければならぬのか。18 自然よ、無情の魔女よ、恆に勝ちほこつた敵よ、私を放してくれ！ 19 私の願望と私の誇りとを喰かすのを止めてくれ！ 20 美の

研究は一つの決闘だ、そこに藝術家は、打ち敗かされる前に怖れの叫びを挙げてゐるのだ。

【翻訳最終稿と刊行本諸版本文との異同】

この翻訳も生前の発表はなく、昭和二年の『富永太郎詩集』(私家版)が初出である。それ以降、思潮社版『富永太郎詩集』(昭和五〇年)まで七冊の『詩集』に収録されたが、それぞれ右の翻訳最終稿とは若干の異同がある。以下、翻訳最終稿との異同を、冒頭に掲げた凡例にしたがつて示す。

一、『富永太郎詩集』(私家版、昭和二年)

表題：藝術家の告白 祈 禱 (コンフィテアール) (巴里の憂鬱才三)

↓ 藝術家の告白 祈 禱 (ボオドレエル)

3 強さには事欲かぬ、えも言はれぬ或る感覚

↓ 強さには事欲かぬえも言はれぬ或る感覚

4 また、「無窮」の刃 ↓ また「無窮」の刃

7 地平線上にぶるぶると顫へながら、その微小と孤獨

↓ 地平線上にぶるぶると顫へてゐる小さな白帆、その微小と孤獨

8 「われ」は速かに消失するからだ！

↓ 「われ」は速かに消失するのだ！

9 私は言ふ、それは然しながら、 ↓ 私は云ふ、然しながら、

11 一種の確實な苦惱を創り出す

↓ 一種の積極的な苦惱を創り出す

12 かん高い、苦しげな顫動 ↓ かん高い苦しげな顫動

16 あゝ、いつまでも ↓ ああ、いつまでも

18 恆に勝ちほこつた敵よ、 ↓ 恆に勝ちほこつた敵よ、

18・19 私を放してくれ！ 私の願望と私の誇り

↓ 私を放してくれ！／私の願望と私の誇り

* 翻訳最終稿では改行されていないが、私家版では改行

二、『富永太郎詩集』（筑摩書房、昭和十六年）

表題…藝術家の告白祈禱コンフィテオール（巴里の憂鬱オ三）

↓ 藝術家の告白祈禱コンフィテオール（ボオドレール）

3 強さには事飲かぬ、えも言はれぬ或る感覚

↓ 強さには事飲かぬえも言はれぬ或る感覚

3 或る感覚があるものだから。

↓ 或る感覚があるものだから。

4 また、「無窮」の刃 ↓ また「無窮」の刃

7 地平線上にぶるぶると顫へながら、その微小と孤獨

↓ 地平線上にぶるぶると顫へてゐる小さな白帆、その微小と孤獨

8 「われ」は速かに消失するからだ！

↓ 「われ」は速かに消失するのだ！

9 私は言ふ、それは然しながら、 ↓ 私は云ふ、然しながら、

11 一種の確實な苦惱を創り出す

↓ 一種の積極的な苦惱を創り出す

12 かん高い、苦しい顫動 ↓ かん高い苦しげな顫動

16 あゝ、いつまでも ↓ ああ、いつまでも

18 恆に勝ちほこつた敵よ、 ↓ 恆に勝ちほこつた敵よ、

18・19 私を放してくれ！ 私の願望と私の誇り

↓ 私を放してくれ！ 私の願望と私の誇り

* 翻訳最終稿では改行されていないが、私家版では改行

以上のように、翻訳最終稿と筑摩書房版『富永太郎詩集』との異同は、第3文の句点から読点への改変の一点を除いて、私家版『富永太

郎詩集』との異同と同じである。

三、『富永太郎詩集』（創元社、創元選書、昭和二十四年）

翻訳最終稿との異同は、筑摩書房版『富永太郎詩集』と同じ。

四、『富永太郎詩集』（創元社、創元文庫、昭和二十六年）

翻訳最終稿との異同は、次の二点を除いて、筑摩書房版『富永太郎詩集』と同じ。

詩集』と同じ。

3 臃ろげではあるが強さには事飲かぬ

↓ 臃ろげではあるが、強さには事飲かぬ

18 恆に勝ちほこつた敵よ、 （翻訳最終稿と同じ…

筑摩書房版では「恆」↓「恒」）

したがって、創元文庫版は、創元選書版と第3文、第18文の二点で相違がある。

五、『定本 富永太郎詩集』（中央公論社、昭和四十六年）

表題…藝術家の告白祈禱コンフィテオール（巴里の憂鬱オ三）

↓ 藝術家の告白祈禱コンフィテオール

ボードレール

7 地平線上にぶるぶると顫へながら

↓ 地平線上にぶるぶると顫へながら

9 私は言ふ、それは然しながら、音楽的に

↓ 私は言ふ、それは音楽的に

六、『富永太郎詩集』（求龍堂、昭和四十七年）

翻訳最終稿との異同は、中央公論社版と同じ。

七、『富永太郎詩集』（現代詩文庫、思潮社、昭和五十年）

漢字がすべて新字体に統一されていることを除き、中央公論社版と異同は同じ。

VI 翻訳草稿と『詩集』収録詩篇

これまで刊行された『富永太郎詩集』は、私家版から思潮社現代詩文庫版まで、いずれも、生前に『山繭』に発表された詩作品を冒頭に掲げ、ついで未発表詩作品、そして最後に翻訳作品をおくという部立てで構成されている。作品の排列は一樣ではないものの、すべての刊本で同じ部立てになっている。

翻訳にかぎって見れば、ボードレール作品十篇、ランボー作品一篇を、ボードレール詩篇を先に、ランボー詩篇をその後におくという部立てが、すべての『詩集』で踏襲されている^五。また、ボードレール詩篇の排列は、私家版と筑摩書房版、創元選書版と創元文庫版、中央公論社版と求龍堂版・思潮社版で、それぞれ共通している。

最初の『富永太郎詩集』編者村井康男は、「第三部には翻譯を取めた。翻譯の定稿としては、ボオドレエルの『人工天國（ハシーシュの詩の部）』がある。翻譯中故人が最も力を盡したものであるが、頁数の都合で収録出来ないで、何れ他の機会を待つことにした。いまこゝには、ボオドレエル十篇（一九二二より二三年頃の譯）ランボオ一篇（一九二四、一二）を収むるにとゞめた」^六と書いているが、私

家版詩集で選ばれたこの形式が、それ以降の『詩集』でも踏襲されたことになる。

これ以降、「第三部にはボオドレエル十篇（大正十一、二年頃の譯）並にランボオ一篇（大正十三年十二月）を取めた」^七と筑摩書房版編者が書き、戦後刊行の創元社版編者が、「本書は右二書〔私家版・筑摩書房版『富永太郎詩集』〕と關係なく原稿に基いて編纂したものである」^八としながらも、「第三集翻譯は既刊本と同種のもののみであるが、制作年代に従つて配列した」^九と記すように、編者がかわつても詩集の構成も翻訳収録作品も、うけつがれてゆく。

「こんど原文と対照しつつ、訂正をテキストとしたので、これまでの諸版とはかなり違ったところがある」^{一〇}と、新しく編集を見直したとする中央公論社版『定本 富永太郎詩集』でも、「Ⅲに翻譯を集めた。それぞれの集において、年代順に配列した。未発表詩篇及び翻譯は原則として最終稿を採った」^{一一}と本文校定と排列の変更について記すのみで、やはりそれまでの刊行本諸版と同じく、ボードレール詩十篇、ランボー詩一篇が収録されることになった。

このようにして、ボードレール詩十篇、ランボー詩一篇が、版を改めながらも、富永太郎によるフランス詩翻譯作品として長きにわたつて読みつがれてきたわけである^{一二}。しかし、『富永太郎詩集』第三部を構成するこうした訳詩について、すでに私家版において「但これらは皆未定稿であり、故人がほんの覚え書き程度に譯しておいたものである」^{一三}と書かれ、そしてまたこれをうけて筑摩版編者も「これらはどれも未定稿であり、個人がほんの心覚えの積りで譯したものである」と、村井氏は斷つて居られる^{一四}。私家版編者の言葉を引きながら注意をうながしていたこと――つまり、いずれの版においても、翻譯作品が定稿として『詩集』に収められたものでないことが、ある種の留保をつけるかのように明記されていたことに、いま一度留意しなければならぬだろう。

そうであるからこそ、すでに引いたように、中央公論社版『定本 富永太郎詩集』編者は、刊行にさいして付した後記「注と異文」のなかで、新たな見直しを経た本文を示すにあたつて、「これまでの諸版は、翻訳は家蔵版『富永太郎詩集』を踏襲したが、草稿には訂正が傍記されただけのものもあり、本文と訂正のどちらを採るかについて、家蔵版編者村井康男に動揺があつた模様で、統一されていない。こんど原文と対照しつつ、訂正をテキストとしたので、これまでの諸版とはかなり違つたところがある」^{一四}と一言つけくわえる必要を感じたのであろう。

ボードレール散文詩篇翻訳の生成過程をこれまで訳詩草稿に実際にあたつて検討することになつたのは、こうした編者たちの言葉と『詩集』各版の比較から発してのことであつた^{一五}。

『定本 富永太郎詩集』編者としての緒言を、大岡昇平は「本書は富永太郎の詩作品の全部と、翻訳の一部を収める」^{一六}と書いている。「翻訳の一部」としたのは、先述したように、私家版編者が「頁数の都合で収録出来ない」^{一七}とし、定本版編者が「あまり長いので、献辞『J. G. F. に』だけ収録した」^{一八}と註記したボードレール『人工天国』の翻訳が収録されなかつたためでもあるが、しかし、それだけではない。

というのも、『富永太郎詩集』各刊本の第三部を構成する訳詩十一篇は、たしかに定本版編者の言うように、富永太郎によつて翻訳されたフランス詩の「翻訳の一部」にすぎないからである。

神奈川近代文学館には、公刊された翻訳作品の訳詩稿以外にも、詩人の遺した翻訳草稿がおさめられている。それらを一瞥してみれば、『山繭』に発表されながらも「頁数の都合で収録出来な」かつたボードレール《人工天国》のほかに、ボードレール、ランボー、マラルメ、ヴェルレーヌの翻訳が試みられていたことがわかる。ボードレール

『悪の華』から『パイプ』、『巴里の憂鬱』から『天職』、『貧民の眼』、『時計』、ランボー『イリュミナシオン』から『小話コント』、『古代』、『H』、『労働者』、『地獄の季節』から『錯乱第一』、『朝』、マラルメ『詩と散文』から散文詩《冬のおのき》、ヴェルレーヌ『サテュルニアン詩集』から韻文詩《女と猫》というように、さまざまな翻訳草稿が遺されているのである^{一九}。

こうした翻訳は、未完のまま放擲されたものもなかにはあるが、大半は詩篇全体が最後まで翻訳されている^{二〇}。しかし、『詩集』に収録されて公刊された翻訳作品を「皆未定稿であり、故人がほんの覚え書き程度に譯しておいたものである」^{二一}というのであるならば、未刊行のままのこうした翻訳作品も、「ほんの覚え書き」かどうかはともかくとして、いずれにしてもすべて「未定稿」であることにちがいはないであろう。

私家版詩集を編むにさいして、編者村井康男（そして亡き詩人の友人たち）が、「第三部」に収める翻訳作品をどのような基準を立てて選んだのかは、先にも引いたように、「未定稿」であるとの但し書きつきで、ボードレール、ランボーの十一篇を収録したとしか「後記」に記されていない以上、うかがい知することはできない。しかし、「収むるにとどめた」^{二二}という表現に注意すれば、その選定の範囲が確たる基準にもとづいているというよりは、漠たる選択であつたであろうことが推測できよう。甲を採り、乙を採らないのは、「頁数の都合で」^{二三}しかない、紙幅が許せば乙も丙もあるいは採られたかもしれない、と想像させる表現である。したがって、『詩集』の「頁数」に問題さえなければ、ほかの作品も収録されるということもあつたかもしれない。しかしまた、現実には『詩集』収録の翻訳作品が画定され、そしてそれ以降の『詩集』にも踏襲されることになつたのには、やはりそれなりの必然性があつたとも考えられる。

たとえば、収録翻訳作品のなかで最も大きな比重を占めるのはボー

ドレール散文詩九篇^三であるが、その翻訳草稿の各詩篇の訳題に添えられていた副題とその異同に、収録をめぐる事情をうかがいみる事ができよう。というのも、九篇のうち六篇には、散文詩篇表題の訳題に添えて、その出典と作品番号とが最初から付されていたが（たとえば《窓》には「(巴里の憂鬱オ三十五)」と添えられている）^{二四}、《藝術家の告白(祈禱)》、《道化とギナス》、《午前一時に》の三篇は、いずれも初稿では出典と作品番号は付されず^{二五}、のちの推敲の段階で、それぞれ「(巴里の憂鬱オ三)」^{二六}、「(巴里の憂鬱オ七)」^{二七}、「(巴里の憂鬱オ十)」^{二八}が添えられることになったからである。

つまり、ボードレール散文詩の翻訳と推敲が進められていくなかで、翻訳者はこうした翻訳草稿をまとめて『巴里の憂鬱』詩篇として発表することを考えるようになり、そのために副題を統一する必要があると感じて草稿に訂正をほどこした――そして、遺稿詩集を編むにさいして、翻訳草稿を検討するなかで、そうした事情が考慮され、私家版『詩集』に翻訳作品としてボードレール散文詩篇九篇が収録されることになった――そう考えて大過ないのではないだろうか^{二九}。《午前一時に》の第一稿の訳題にそえられていた「未定稿」という文字が、詩人みずからの手で削除されたことは、おそらくその傍証となるだろう。

神奈川近代文学館にはまた、定本版編者大岡昇平が遺した富永太郎関係資料もおさめられている。そのなかには、数次にわたって『富永太郎詩集』を編纂してきた作家が、宿望の『富永太郎全集』刊行準備のために書きとめていた覚書もいくつか遺されている。そのひとつによれば、『全集』には、すでに『詩集』に収録されてきた翻訳作品のほかに、先に挙げた、ボードレール、ランボー、マラルメ、ヴェルレーヌなどの未公刊の翻訳の収録が構想されていたことがわかる^{三〇}。ボードレール《パイプ》、《天職》、《貧民の眼》、《時計》、《人工天國》、ランボー《小話(コント)》、《古代》、《H》、《労働者》、《錯乱第一》、《朝》、マラルメ《冬のおのき》、ヴェルレーヌ

《女と猫》など、翻訳未完のものも含めて、さまざまな翻訳作品が『全集』に収録されることが予定されていたのである。

また、フランス詩を筆写した「詩帖」の『全集』収録にかんする編集メモも資料に含まれている^{三一}。もし『全集』刊行が実現していたなら、さまざまな翻訳作品や「詩帖」が収録され、フランス詩を読み、翻訳する詩人の姿がより鮮明に浮かびあがることになったであろう。富永太郎におけるフランス詩の問題を考えるためには、そのように、これまでの『詩集』収録作品だけではなく、未刊行の翻訳作品、未完の翻訳、さらにはまた、いずれ翻訳のかたちをなしたかもしれない、「詩帖」のなかに埋もれた幻の翻訳詩篇も含めて、重層的多面的に考えていく必要があるだろう。

註

一 『道化とギナス』／《射的場と墓地》——ボードレール『パリの憂鬱』富永太郎訳稿の成立（『鳥取大学大学教育支援機構教育センター紀要』第一〇号、一一二頁―九九頁、二〇一三年。頁数逆順表記は縦書きのため。以下同）、《或るまど、どんなに》——ボードレール『A une Madone』富永太郎訳詩稿の成立（『外套と聖盃』補遺）（同、第二二号、九二頁―七五頁、二〇一五年）、《港》／《酔へ！》／《計畫》——ボードレール散文詩篇富永太郎訳詩稿の成立（『鳥取大学大学教育支援機構教育センター紀要』第一三三号、九四頁―七四頁、二〇一七年）。

『富永太郎詩集』諸版に収められた富永太郎訳ボードレール韻文詩篇・散文詩篇は、《或るまど、どんなに》《道化とギナス》《射的場と墓地》《酔へ！》《窓》《ANY WHERE OUT OF THE WORLD》《港》《計畫》《午前一時に》《藝術家の告白祈禱》の十篇であるから、ボードレール詩篇富永太郎訳稿生成過程と刊行本諸版本文との異同についての検討は本稿で終了する。富永太郎によるボードレール散文詩翻訳については、ほかの詩篇翻訳をめぐる問題とともに、稿を改めて論じたい。

二 大岡昇平編『定本 富永太郎詩集』（中央公論社、昭和四十六年）、「注と異文」一四六頁

三 以下、第一稿については、訳詩稿本文の改行は実際の翻訳原稿に従う。

四 ルビ「コンフィテオール」の原語は「confiteor」。ラテン語で「私は告白します」の意であるが、ラテン語がそのままフランス語に転用され、「この言葉で始まるカトリック典礼の祈り」を意味し、「この言葉によって、自らの罪を認め、悔悟の念を表わす」と説かれる（『フランス語ロベール大辞典』第二巻、四三二頁 [Le Grand Robert de la langue française, t. II, Le Robert, 2001]）。この語は、富永太郎が愛用したとされる仏和辞典『模範佛和大辭典』（山本直

文・太宰施門他編、白水社、大正十年）にも、「告白の禱り（舊教）」（同辞典、三八四頁）と同様の語義が掲げられている。

したがって、「告白の祈り」を意味する語として、「告白祈禱」全体にルビが付されるのが適切だといえるが、ここでは、訳詩稿に記されているルビにしたがう。なお、刊行本諸版では、翻訳稿そのままではなく、「告白祈禱」全体にルビが付されている（後述の各刊行本諸版との異同を参照のこと）。

五 中央公論社版『定本 富永太郎詩集』以降では、これに《人工天国 J. G. F. に》が加わる。

六 『富永太郎詩集』（私家版、昭和二年）「後記」、四頁（頁立ては詩篇の部と後記の部でそれぞれ独立した頁付けとなっている）。

ボードレール『人工天国』（Les Paradis artificiels）は、当時邦訳はまだなく、大正十二年初夏からその翻訳を始めた富永太郎は、「『人工天国』を一枚訳すこと」を「日課」にしていると友人に手紙で告げ、やがて「『人工天国』は出版したい欲望が大へん出て来た」と書きおくるようになり、同人誌『山繭』にくわわるにおよんで、大正十四年春、『人工天国』『ハシーシュの詩』が同誌第四号・第五号に掲載された。なかでも第四号は誌面全体が富永太郎の詩と翻訳で埋められ、翻訳『人工天国』は雑誌全三十三頁中二十八頁を占めることになった。私家版編者村井康男が、この『人工天国』翻訳について、「翻譯中故人が最も力を盡したものと記したのはそうした経緯によるものである」。

七 『富永太郎詩集』（筑摩書房、昭和十六年）「後記」、一六九頁。

八 『富永太郎詩集』（創元社、創元選書、昭和二十四年）「凡例」、二頁および三頁。

九 『定本 富永太郎詩集』「注と異文」、一四六頁。

一〇 『定本 富永太郎詩集』、二頁。

二 たとえば、安東次男は、早い時期に書かれた富永太郎論のなかで、富永太郎を評して「日本に生まれたほとんど唯一のボードレリアン」(傍点原文)という表現でその論を締めくくっている(安東次男「詩人の境涯」、『幻視者の文学』、弘文堂、昭和四十五年、一三三頁、初出は昭和三〇年)。

三 『富永太郎詩集』「後記」、四頁。

四 『富永太郎詩集』「後記」、一六九頁。

五 『定本 富永太郎詩集』「注と異文」、一四六頁。

六 ボードレール散文詩篇のほかに『詩集』に収録された詩作品は、ボードレールとランボーの韻文詩が各一篇あるが、ボードレールの韻文詩(或るまど、んなに)の翻訳稿生成過程については、前掲「或るまど、んなに」——ボードレール『*À une Madone*』富永太郎訳詩稿の成立(「外套と聖盒」補遺)』参照。また、ランボー『饑餓の饗宴』訳詩稿(資料番号40169)には、ボードレール訳詩稿各篇とくらべれば、ごくわずかな改変・異同が見られるだけである。

七 『定本 富永太郎詩集』、二頁。

八 『富永太郎詩集』「後記」、四頁。

九 『定本 富永太郎詩集』「注と異文」、一七四頁。

一〇 各翻訳草稿の資料番号は以下の通り。ボードレール『パイプ』(40173)、『天職』(40185)、『貧民の眼』(40179)、『時計』(40189)、『ランボー』、『小話(フント)』(40174)、『古代』(40178)、『労働者』(40176)、『錯乱 第一』(40177)、『朝』(40175)、『ラルメ』、『冬のおのき』(40184)、『ヴェルレーヌ』、『女と猫』(40186)。

一一 ボードレールの散文詩『天職』、『貧民の眼』、『時計』とラルメの散文詩

『冬のおのき』の翻訳は、途中までで途絶えており、未完となっている。

一二 『富永太郎詩集』「後記」、四頁。

一三 『富永太郎詩集』「後記」、四頁。

一四 先に見たように、ボードレール散文詩の翻訳には、公刊された九篇以外にも、『天職』、『貧民の眼』、『時計』の三篇があったが、しかし、この三篇はいずれも未完の翻訳であつたため、当然ながら収録されることはならなかった。

一五 ただし、『港』異稿には「ボオドレエル」と作者名が記されているだけである。前掲「港」／『酔へ!』／『計畫』——ボードレール散文詩篇富永太郎訳詩稿の成立』参照。

一六 『藝術家の告白 祈 禱』は空白、『道化とギナス』は「ボオドレエル」、「午前一時に」は「(未定稿) ボオドレエル」となっていた。

一七 翻訳草稿でのこの副題が、各刊本においては、作者名の「ボオドレエル」または「ボードレール」に変えられることになる。

一八 散文詩以外のボードレールの一篇、『悪の華』中の韻文詩(或るまど、んなに)の『詩集』への収録と『詩集』各刊本中におけるその位置の変遷については、「外套と聖盒——ボードレール(或るまど、んなに)富永太郎訳をめぐる」(鳥取大学教育支援機構教育センター紀要 第七号、二〇一〇年、一三三頁—一五二頁)参照。

一九 大岡昇平「原稿『富永太郎全集』翻訳篇「編注」」(資料番号113173)。

二〇 大岡昇平「原稿『富永太郎全集』「詩帖—テクスト」」(資料番号113174)ほか。